

～西郷隆盛の書～

人皆苦炎熱
我愛夏日長

世の人々は夏の日の炎暑に苦しんでいるが
私は一年中で一番長い夏の日が好きである。

薰風自南来
殿閣生微涼

暑さは厳しくとも、時折り南からかくわしい風が吹いて来ると
炎暑に見舞われた宮殿もわずかに涼くなって、心地よい気持ちを味わうことができる。

最初の二句は唐の文宗皇帝が詠んだ「夏日聯句」です。後の二句は文人の柳公権が転句としてつけたものですが、この語が有名なのは後代の詩人・蘇東坡がこの語について以下の句をつけることで有名になりました。

一為居所移 一たび居の爲に移されて
苦樂永相忘 苦樂永く相忘る
願言均此施 願わくば言わん、此の施しを均しくして
清陰分四方 清陰を四方に分けたんことを

「皇帝は広々とした宮殿の中におられるから、暑く苦しい夏日の長いのが好きといわれるだろうが、天下万民は猛暑の中に本当に苦しんでいる。皇帝たるものもつと庶民の生活実態へ思いはせていただきたいものだ。」と皇帝の身勝手に人民の苦しみを思いやることのない態度を厳しく批判したとされています。この書は1872年の揮毫とされています。西郷は、翌年、明治政府の方針と対立して下野していますので、島津斉彬が理想とし、多くの仲間の犠牲の上にてできた新政府のありさまを苦々しい心境で語ったものだと推察できます。

本書は、小生と高祖父(伊地知嘉右衛門)を同じくする再従兄所有の西郷隆盛の真筆で、南洲神社の五十年祭にも出品されています。今回、明治150年を記念して、再従兄の好意で本書を掲示しました。幕末、維新、明治の時代と、この国の礎をつくられた英霊の方々に謹んで哀悼の誠をささげるものであります。



株式会社新日本科学
代表取締役会長兼社長
永田 良一